COVID-19 への対応から生まれた教育・研究の現場における試行錯誤と可能性

Challenges and opportunities for education and research in the time of COVID-19

開催日時：2021 年 8 月 3 日 Zoom にて実施

出席者：秋田 典子（千葉大学）、上田 裕文（北海道大学）、町田 怜子（東京農業大学）

光成 麻美（兵庫県立大学 / 兵庫県立淡路景観園芸学校）

司会：一ノ瀬友博（慶應義塾大学）、新保奈穂美（兵庫県立大学 / 兵庫県立淡路景観園芸学校）

座談会の趣旨

COVID-19 により教育・研究の現場に様々な影響が及んだ。それは必ずしもネガティブな対症療法だけでなく、これからの教育・研究のあり方にポジティブな気づきを生み出すものもあったはずである。2021 年 8 月時点で、約 1 年と数ヶ月、どのように現場は試行錯誤し、新たな発見をしてきたのか。地域や教育システムの異なる様々な大学に所属する教員に集っていただき、お話を伺った。

1. 各大学での対応

一ノ瀬：まず、これまでの期間で、皆さんのご所属の教育機関ではどのような対応をされてきたのか教えてください。

町田：東京農業大学の地域創成科学科は、ひと学年約 110 名のため実習等も含めて工夫が必要でした。コロナ禍で 2020 年 5 月 11 日から前期授業がオンデマンドでスタートしました。東京農業大学は実学主義のため多くの実習実験演習があり、前期は全てオンデマンドによる実習、後期からは全ての学年の実習は対面で行われました。私達の学科では学生を 4 班に分けて、1 回の実習で 20 名から 30 名程度の分散型の対面実習を行っていました。今年も対面での分散型実習体制は全ての学年で継続し、座学は全ての学年が必修科目を対面授業、その他の授業はオンデマンド授業としました。対面授業は 150 人が入れる 2 教室連結で繋ぎ、学生が均等に教員の授業を直接受けられるよう週ごとに教室を入れ替えていました。

秋田：千葉大学園芸学部のキャンパスは松戸市にあるため、都内の大学ほどの緊張感ではなかったと感じています。緊急事態宣言と蔓延防止措置など、発出されている宣言の違いもあったと思います。2020 年度は座学のほとんどがオンデマンドという特徴がありました。これまで千葉大はアクティブラーニングに力を入れていたので、オンデマンドの座学をどのように実施するか、練り直す必要がありましたが、実際の授業の形態はかなり教員の裁量に委ねられて

いました。2021 年度からは対面も導入されましたが、その後の緊急事態宣言等によりオンデマンドに変えるなど、常にフレキシブルに対応をしています。

上田：北海道大学国際広報メディア・観光学院で、私は観光という立場で講義などを行っています。大学院しかないということもあって、少人数の演習講義が中心で、文系寄りのため各教員の裁量に任されている面があります。大学院の方針としては、オンライン中心で、申請をすれば対面もできますが、大学全体の BCP レベルによってコロコロ変わる状況なので、多くの先生はオンラインで授業をしています。演習など必要に応じて単発で対面授業をする先生の中にはいますが、情報は共有されていないので、誰が何をやっているかよくわかりません。2020 年度、本学院は判断が遅れて最初の一週目の授業だけやってしまいました。慌てて全学に合わせ休校になり、5 月の 2 週目ごろ再び授業をやるということになりました。個人的には結果的によかったかなと思います。北大では北海道出身の学生は半分ぐらいしかいないため、実家に待機して一度も大学に来ないまま 5 月の連休を超える学生が 1、2 年生だと多かったのですが、うちの学院は最初の一週目に授業をやったこともあり、学生たちが大学の近くに集まっていた、その後の対応が楽になりました。観光の学院なので、どうしても実習があるのですが、その辺りがかなり難しく、また観光地に観光客が来なくなったので、修士論文や博士論文の研究で問題を抱えた学生が多く出てきました。

光成：淡路景観園芸学校で、私はインストラクターという立場で、主にデザイン分野の実務サポートをしています。景観園芸学校は兵庫県立大学大学院と、園芸療法課程・生涯学習課程の 3 課程があります。大学院は 1 学年 20 名とかなり少人数制で、全寮制です。昨年度は約 1 か月間休校となり、5 月の連休明けからオンライン授業が始まりました。8 割程度の学生は既に 3 月末から入寮していて、一部入国できていない、あるいは実家に一旦戻り休校明けに来校する学生が一部いる状態でした。基本的には県立大学の

方針に従いますが、全寮制で少人数というかなり特殊な環境であるため、措置の交渉をしながら6月上旬には一部対面授業が可能になりました。6月上旬の段階では8割ぐらひは対面授業が可能になっていたのではと思います。

2. 実習演習での工夫

一ノ瀬：皆さん、去年の5月の連休明けからようやくオンライン授業をスタートできたという大きな流れがあり、その後それぞれの教育機関の置かれている状況・場所に合わせてカスタマイズされてきたということかと思いました。次は造園、あるいはランドスケープの分野では様々な形で実習・演習が入ってきますが、できるだけオンキャンパスでできるように対応をされたと思います。それを始める段階でもきっと、大学や学校の方針と、逆に教員からの要望で、せめぎ合いがあったのではと思います。

光成：景観園芸学校は多くの授業が屋外での実習などであるため、オンライン対応が難しいものが多いのではないかと考えていたのですが、やり始めたら思ったよりもできるものが多いという印象がありました。教育効果が見られないものやオンラインでは実現不可なものに関しては授業の時期を遅らせました。私が担当している製図関係の授業で申し上げますと、手描きの部分については、オンラインで十分対応が可能だと思いました。ですが、模型などのモノを介して相互でやりとりしながら指導する内容については難しい部分がありました。そのほか庭を作る実習などでは、実際に学生の動作を見ながら指導することが大半であるため、そのような部分については難しそうな印象でした。

一ノ瀬：これまで教室で学生に教えていたときと比べ、オンラインでは学生の理解度や習熟度はいかがですか。

光成：製図に関しては大きな違いはないと感じました。今までは描き方を実演した後に学生に同じことをしてもらい、それに対して随時アドバイスをするという作業手順でした。オンラインの場合はタブレット等を使用して実演したのち、各学生が自室で描いたものをオンラインで共有してもらい、それに対して画面越しに添削をしていく、または次回授業時に添削したものを共有するというやり方をしました。対面もオンラインも同じかと思います。

上田：うちは一般的な演習では、オンラインでも、グループディスカッションなどでZoomのブレイクアウトルームを使い、そんなに影響はありませんでした。一方で現地実習については、休校やBCPレベルによりスケジュールが変更になり日程調整が大変でした。宿泊自体も難しく、道外に出られないので、日帰りの対象地を選ぶのですが、受け入れ先が懸念する場合があります、事前の打ち合わせにすら行けないケースも結構多かったです。実際に現地で実習をやった先生はおそらく1名です。しかも冬学期ですね。多くは北大キャンパスを使って実習を行うという感じにな

らざるを得ませんでした。今年度は道内で日帰り実習がいくつか行われています。あと大学院なので、外国人留学生が多くて、渡日できていない学生も含まれています。それ以外にも社会人学生で会社から実習参加にストップがかかる場合は、できる限りオンラインで中継する、録画を見てもらって課題を出すなどの対応がされました。

一ノ瀬：大学院だからこそ人数も多くないので、きめ細かく対応がある部分では可能だったと思います。学生の方から、普段なら行ける現地実習に行けないことに対しての不満や、渡日できない留学生から要望は来ませんでしたか。

上田：大学と相談しながら、教員としてはできるだけリスクを取らないように、実習は諦める予定でした。しかし、やはり学生から「どこか行きたい」と声が上がリ、近場で日帰りで行けるところで何とかやったというのが最近の動きです。本来であれば、欠席者に対しては別課題でも良いところを、できる限り録画や中継の対応を行ったのも、全て学生の要望からというところはあります。

秋田：私は学部でランドスケープの設計実習を担当しており、これまでは教員側がサイトを決めて、さらにグループワークで提案を検討するという形でずっとやってきました。しかしサイトに行くのもグループワークも厳しいという状況になったので、思い切ってやり方を変えて、まず個人ワークにし、グループワークを諦めました。さらにサイトも自分で決めて良いということにしました。もちろんテーマやプロセスは指示をしています。結果的にこれまでとは違う新しい提案がたくさん出てきて、新たな設計実習の良さも知ることができました。今年度は2020年度に試みた方法にグループワークを取り入れました。サイトは個人で設定するけれど、発表するときにグループを作って、グループの中でお互いのサイトの違いやリソースの違い、設計の特性の違いを踏まえながら発表するという形になりました。

一ノ瀬：サイトを自分で選んできた場合に、教員として成果の評価が難しかったのではなかったでしょうか。

秋田：テーマ設定をかなり明確にしました。発表すべき項目を詳細に決めて、例えばこういう分析項目を入れてくださいとか、プランはこういうレベルのものを出してくださいとか、そういうふうにきちんとアウトプットのレベルを指示すると、明確に作業量の違いは現れてきました。みんな自分の住んでいる近くにサイトを持ってくるので、だいたい関東近郊あたりのどこかみたいな感じになったため、実際にはサイトを指定しなくても、サイト自体にはあまり差は出ませんでした。

上田：サイトを選ぶときの例えばスケールなどのような条件設定が気になるのですが。

秋田：都心から20キロから50キロ圏の大都市郊外とまず設定しました。それから、50戸以上の住宅団地があって、さらにそこに農的要素があるような場所、としました。そ

の上で条件として、自分の10年後のライフスタイルをそこに重ねてくださいという形で指示を出しています。今までだったら例えば、この空間のマネジメントはNPOがしますとか、ある意味無責任な提案が多かったんですけども、自分がそこに住んでいる設定にすることで、自分の仕事が忙しくてほとんど農作業に関われないことを前提に、住民が関わられるような農のデザインをするなど、かなり現実的な提案が出てきたので非常に面白かったですね。

町田：地域創成科学科には、1年生前期の「地域交流実習」で学生が農山村に行き、地域の方からヒアリング調査等を行って、地域の課題解決を考える実習があります。コロナ禍で学生を地域に連れて行けない、地域の人と交流ができないところが実習の中で一番苦労した点になります。そこでオンデマンド型の実習で工夫した点は、自分の出身地を対象地とし徹底的に調べ地域の捉え方を身に付けるカリキュラムを新しく組み立てたことです。学生には自宅のパソコンから取り組める情報収集方法を教え、地形、河川、地質、植物、生き物、人口、財政、観光、交流、文化、防災などテーマごとに調査をしました。その後、世田谷キャンパスの近くにある国分寺崖線を調査対象地にし、自身の出身地域と世田谷区を比較しながら、地域の捉え方を短期集中で理解できる実習の組み立てにしました。また、長野県の限界集落の地域の皆さんへもzoomでヒアリング調査を行いました。この実習方法で良かった点は、学生が自分の出身地を対象に地域を捉える視点や捉え方を体得したことによって、他の地域との比較がしやすくなり、世田谷や長野県の皆さんへのヒアリングの内容も具体的となりディスカッションも深まったことです。

一ノ瀬：当然、農村地域で調査ができないというのはあったと思いますが、その選択肢を捨て、キャンパスの近くでやろうというのは早い段階で決められたのでしょうか。

町田：地域創成科学科のどのフィールドでも長いご縁・信頼関係のもと、地域の皆さんが学生を受け入れてくださっていました。実習のために学生を農山村に連れて行きたくても、コロナ禍で感染拡大などのリスクが発生した場合に30年以上築いた農大と地域との信頼関係を失うことの方が損失は大きいという判断しこちらの方で早めに世田谷キャンパス周辺で実習を行うことを決断しました。

光成：景観園芸学校もフィールドワークがかなり多いので、どうしても対面での調査が必要なものなどは後期に一旦遅らせるなどの対応をとったものもあります。調査対象地なるべく近場にする、所有する実習バスで行ける範囲で設定するなどしました。訪問できない自治体などへはオンライン発表会などを行い、フィードバックをいただきました。

一ノ瀬：学生あるいは教員の研究についても、どんな問題があって、逆に何かうまくブレイクスルーができたか、共有いただければと思います。

町田：卒業論文等の教育研究面ではZoom等を使用し地域の関係者や行政の方とのヒアリング調査が可能となり、調査実施前に調査内容やアンケート内容など、フィールド関係者との事前の合意形成・調整は非常に楽になりました。その事前調査に基づき限られた時間で効率的に現地調査を行いデータを取っていました。また、小学校や中学校と一緒に環境教育のプログラム開発を行う研究では、その教育効果を分析するために、コロナ前までは紙でアンケートを送付し小中学校の先生に取りまとめ、返送していただいていた。コロナ禍では、Google フォームを用いて先方の先生方と私と卒業で扱う学生とでアンケート内容を共有することができ、先方の小学校・中学校の先生に教育プログラムをすぐにフィードバックできるようになり、この調査研究は非常に円滑に進みました。一方で、現地に行かずヒアリング調査だけでは、学生が研究の解を導くことは難しいので、学生が現場に行けるフィールドは必要だと思います。またコロナ禍で現場にいける回数が限られ現地でデータを収集する調査ができていない分、ずっと取り組んでみたいと思っていた大型アンケート調査に着手するなど、東京にいても実施可能な研究を創意工夫して行うようになったと思います。またZoomで大学内外の様々な分野の先生方と場所を超えて議論・教育できるようになり研究教育のバリエーションも増えました。

一ノ瀬：次は学部から博士まで全部ある千葉大について、よろしくお願いします。

秋田：今年の造園学会のコンペに学生たちが応募する時に、密を避けるためにオンラインワークショップツールのmiroを導入しました。このmiroで、グループワークを完全に仕上げて、提出まで持っていくことができました。このようなオンラインツールが非常に便利だと研究室の学生たちも気づき、例えば卒業のテーマ決設定もこれでやっちゃおうと言って、miroで付箋紙を出しながら検討しました。クリエイティビティを高めるツールの導入機会として、こうした新たなチャレンジはとても良かったです。

一ノ瀬：現地調査が必要な卒業論や修論での工夫はいかがでしょうか。

秋田：現地調査は研究のために不可欠で移動が可能な状況であれば、行っています。基本的に人に会わないことにし、密にならないような人数配分でレンタカーで現地に行き、きちんと感染対策もして、レンタカーを降りるのは人がいないところにする。

一ノ瀬：景観園芸学校は専門職大学院ということで、修士しかないということですが、他のところの修論とは違うのかなと思います。

光成：修論のほかに作品やプロジェクト形式でも修士が取れます。作品の対象地選定では自国を対象にする留学生も多く、現地調査ができないままの学生もいました。プロジェ

クト形式のものでは、デジタルを応用したものは増えたのかなと思います。

一ノ瀬：上田先生のところはいかがでしょうか。

上田：観光なので、データを取る相手が人間になることが多いです。今までは、実証データ、つまり観光客を観察したり、現場に行ったり、ヒアリングやアンケートをしたりということがあったのですが、それがほとんどなくなって、観光協会や役場の人などに対する代表者インタビューを中心とした修論が増えてきているという印象は受けます。そのため、基本全部二次データになるので、インタビューした特定の人の意見がまとめられていて、物事をいろんな角度から自分自身で見なくなっている感じが心配です。

3. インフォーマルな場での学びをどう確保するか

上田：ランドスケープ、特に理系の方は研究室があって、学生同士の横の繋がり、もしくは先輩後輩の縦の繋がりです。学ぶところが多いと思います。研究室への出入りが難しい現在、皆さんどういう風にされているか聞けるとありがたいです。うちはゼミもオンラインでやっている状況なので、私の知らないところでの学生同士の学びが、完全に失われていて、どうしたらいいのかなと頭を悩ませています。

町田：私達の研究室は4年生が30名、3年生も25名と非常に学生が多いです。2020年は休校中でも、Teamsで週に1回4年生と3年生、それぞれでゼミをしました。2020年の秋からは広い教室を借りて、学生が望む対面かzoomの参加形態で3・4年生合同でゼミを行いスクリーンで学生のビデオを映し和気藹々とゼミを行っています。3年生は、昨年度2020年には実習日等限られた曜日にしか大学に入構できなかったためか、対面でのゼミ参加は比較的3年生が多いです。みんなが一堂に会することができない寂しさもありますが実習はグループワークが多いので、ゼミ活動も3・4年生と一緒に楽しく取り組んでいます。

秋田：千葉大では博士やM2は研究室に来て作業をしたり、論文書いたりしていると思います。それより下の学年は、大学に来ていないと、あまりこちらがコントロールしない場合、一日中アルバイトみたいになってしまう。それでは本末転倒なので、きちんとゼミはオンラインも含めて行い、研究の進捗確認をするようにしています。縦の繋がりには厳しい部分があるんですけども、国立大学、しかも造園だと1教員が担当するのが1学年3、4人でも多いぐらいなので、今は、対面の場合は学年別にゼミをするという方式を採っています。あとは定期的に大教室を借りて全体での研究発表会をオンラインをミックスしながらやっています。

上田：どうしても先生と直接の繋がりになってしまうのはどこも一緒なのかなと、先生方のお話を聞いて思いました。

秋田：逆にコロナでテレワークなどが増えて、いろいろ思うところあるのか、卒業した学生が論文を書きたいと言っ

て相談してくることはありますね。

上田：うちも社会人大学院生が今年増えましたよ。去年出願してきた今年の入学生の中に、こういう時期だからこそみたいな感じで、大学院に来た学生は確かに多いです。

秋田：テレワークで仕事の都合がつけられるので、学び直したいみたいな。改めてもうちょっとやりたいという、そういう需要が出てきているのは興味深いと思いますね。

4. コロナ禍で見つかった可能性

一ノ瀬：これからの話として、オンラインになることによって見えてきた可能性はいろいろあると思います。慶應義塾大学ではキャンパスを越えた授業の履修が容易になったという声がありました。また、学生の論文審査は、オンラインにより教員のスケジュールも合わせやすいし、副査に海外の先生を入れるハードルが一気に下がったということがあります。さらに、授業でゲストを呼ぶときも、オンラインなので海外の方含めその時間だけ空けていただければよいので、ゲストのバリエーションが一気に増えました。可能性が広がって良かったと思っています。

上田：確かに観光学では、実務家の方にスポット的にゲストスピーカーをお願いすることも多かったのですが、オンライン化で全国のいろんな先生方にご講義いただけるようになったのはすごく大きいと思います。

町田：私も遠隔授業の教育効果は二つあると思っています。一つ目は、3年生の観光論を担当していますが、日本各地の観光で苦労している卒業生の生の声を、Zoomで学生とつなぎリアルな議論ができた点です。二つ目は、やはりコロナ禍でフィールドに行けないという制約条件が、学生を現場の情報をいかに得るのかという強い気持ちを醸成した点です。Zoomの事前準備も一生懸命取り組んでいます。現地調査もその機会を最大限に生かそうとヒアリングも積極的に取り組みました。フィールドでしか得られない研究データを得ることを学生が渴望してくれました。

光成：オンラインが主流になったこともあり海外の方を呼んだセミナーを昨年度は6回開催できました。お話を聞ける方の幅が広がったことは大きく、それはこの後も続くものかと思っています。フィールドワークについては他の大学に比べると実施できているとは思いますが、それでも学生からすると、フィールド重視の学校を選んで入学しているので、それに対して少し物足りないという欲求はやはりあります。現地調査時にできるだけ人との接触を減らしながら、ヒアリング内容等は事前に問い合わせをするなど、なるべく現地調査自体は減らさない方向で調整していました。

上田：秋田先生の「人に会わないフィールドワーク」というのが目から鱗でした。フィールドワークは、行って現場の人に会って話してなんぼだというふうに思っていたのですが、現場で景観から読み解くというところはやはり大切

ですね。人の言ったことをそのままデータにして論文にするのではなくて、人に会わなくても現地に行ってちゃんと自らの体験から読み解くことは、むしろ我々も意識してやっていかなきゃいけないのだろうなと、すごく感じました。

秋田：ランドスケープはやはり現場に身を置くということが大事だと思います。もちろん、話が聞ければ一番いいんですけど、それは別途 Zoom でもなんとかなる。究極の選択ですけど、話だけ聞くと、現場だけに行くのとどちらを取るかというと、研究の内容にもよるものの、話なしで現場に身を置くだけでも何かわかってくるものたくさんあるし、それを理解する力を育てるのがランドスケープの教育では大事だと思います。

一ノ瀬：コロナには関係ないのですが、実は私もよく予備調査に行けとか、とにかく現場に出ると、必ず学生に言っていました。それが10年くらい前から、Google Earth のストリートビューで見て、予備調査に「行った」と言う学生が出てきました。現地がどんなだったかと詳しく聞くと途中で話が怪しくなって、最後には「Google Earth で見ました」ということで、当時はびっくりしました。学生にはそういう感覚が普通になってきているのだろうと思います。千葉大にはそんな学生いないですか。

秋田：そこはさすがにわかっていると思いますね。本当に行けないのか、どうすれば自分の得たい情報が得られるのか、工夫してみようと考えたら、先ほどのように誰にも会わないで行ってくるのはどうだろうとか、そういうアイデアを生み出せる力が、これから厳しい社会を生き抜いていく上でも必要だと思います。

一ノ瀬：オンライン製図もそうですが、確かにそういう今までないスタイルも出てくるのかなと思います。

5. 造園、ランドスケープの強み

秋田：コロナ禍で見えてきた造園分野の強みというか、例えばこういう空間がやはり造園分野で貢献できるよね、というものがあったら、ぜひお伺いしたいです。

一ノ瀬：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスは、アメリカの郊外型キャンパスのように芝生が広がり高木が点在しています。芝生の上でオンライン授業を受けている学生がたくさんいます。公園でリモートワークしている人がいるという話もよく聞きます。人が一定の距離を保ってられる空間として緑地が活用されていて、その多機能性が明らかになってきました。キャンパスの中でもそのことが実証されているようで、とても面白いと個人的に思っています。

上田：そうですね、教員も出張先から授業とかできるようになると、またちょっと違ってきますよね。

観光分野では政策を含め社会状況があまりにも目まぐるしく変化しすぎていて、我々教員も、教育や指導が追いつかない。我々も近い将来の見通しがわからないみたいなどこ

ろがあります。本来はコロナ禍に限らず、またどんな分野でも一緒だと思うのですが、時代が変化するなかで、我々が習ってきたことだけを教えるのではなくて、我々自身もわからないことに、学生とどう向き合って取り組んでいくかを日々模索しなければならない。そんなことを極端な状況下で、改めて思い知らされました。

町田：私もこのパンデミックの中で緑地やオープンスペース、ランドスケープの役割を改めて強く実感しました。学生が卒論で研究の問いを立てるときにも、今自分たちが学んでいる分野は、これからの With コロナの社会で非常に必要となる分野だと、自信を持って取り組んでくれています。コロナ禍での自分を見つめ、卒業論文の問いを自分ごととして立てやすくなったのかなと思います。一方で観光の研究は旅館の方にヒアリングしても悲しい気持ちにはなりますが、学生はリアリティのある地域の問題に真正面から取り組んでくれています。このような教育経験が学生たちの次の一歩になってくれることを期待しています。

秋田：コロナになって、変わらず動いている人と、近くでしか動かない人と、そういう人流の変化みたいなものを可視化すると面白いのようになって思います。動いている人は結構動いていますよね。

一ノ瀬：今回の特集でもキャンプ場では、利用者が増えているという話があります。環境省が進めているワーケーションも、もともと動いていたものですが、コロナ禍でさらに価値が出てくるでしょう。観光の側面から、東海大学の田中伸彦先生曰く、デスティネーションは何にも毀損していない、途中の移動の部分だけが完全に奪われてしまった、ということだそうです。

上田：コロナ禍で緑の大切さが再認識されたと言われますが、逆に私達が求めているのは緑の環境だけじゃないということも明らかになったような気がします。空間そのものでも、そこでのアクティビティでも、また緑の癒しだけでもないものが求めているような。

秋田：実際はそこに行くだけが目的ではなくて、そこで何か体験することだとか、もっと総合的な、五感的なものだと思いますね。コロナなので緑が大事、という文脈の中で、大規模公園が閉鎖されたり、身近な公園では利用が増えたり、河川敷の利用が増えたり、散歩する人が増えたり、空間利用やアクティビティの変化が色々ありましたね。

一ノ瀬：東京の公園は、郊外ではかなりよく使われているようですし、それこそ産業革命のときにパブリックパークが誕生したわけですが、そこに原点回帰しているような状況かと思います。公園や緑地は、特定の用途に特化しているわけではなく、人々の様々なニーズに応えることができる多機能性が大事だと思います。こういう特殊な状況で、色々な活動を広く許容できるところが、公園緑地の強さかなという気がします。

上田：はい、まさに、緑というのは一面的な機能を持つのではなく、もっと包括的な多機能性を持っていることが浮き彫りになったと私も言いたかったのだと思います。

6. 「集まる」コストと価値

新保：これだけオンラインツールが増えてきて、情報も増えて、直接集まらなくてもいいとなってきたところで、これから学会はどういうふうになればいいのでしょうか。

上田：本来の学会の役割が果たしているかどうかというのは確かにちょっと難しいと感じます。もともとの知り合いとは繋がれるのですが、新たに人脈が広がっていくかというと、なかなか広がらないですね。そうすると、村社会的に身近な仲いい人たちとは繋がりが続くけど、新しい人と繋がるのは結構難しい。繋がってもすごく目的的ですよね。目的に沿ったことしかやらないので、それ以外の部分がありません。今後、新しい研究仲間も増えていったりするのかな、今の学会の中でそういう機会があると言われると、結構難しいなとうふうに感じるところはあります。

一ノ瀬：コロナ禍で国内外の学会の大会や国際会議がオンライン化されました。最新の情報を入手するという意味では、わざわざ海外まで足を運ぶ必要がなくなり、ハードルが一気に下がりました。そのような状況の中で、日本国内の学会がどのように生き残るかですが、造園や農村計画、都市計画という分野では、現場の重要性が鍵かと思います。国内には国内の現場がありますので、それを見てそこで議論することを重視することによって、これからも生き延びていく意味があるのでしょうか。オンラインとの組み合わせ、ハイブリッドは、非常に手間もかかるしお金もかかるのですが、これからもう少しこなれてくると思いますので、広く薄くはオンラインで配信するのが良いと思います。そして、学生らが様々な専門家と繋がったり、じっくり議論するためには現場に行く、というようになるのかと思います。そのうち大学も、教室で授業を受けたければ授業料2倍です、みたいなことになるかもしれません。

秋田：繋がりを作ることの価値がある、コストがかかるということですね。今までのように容易に繋がりを作れないから、きちんとそれに対してはコストをかけましょうと。

一ノ瀬：教えているコンテンツだけだったら、別にビデオでも本でもあるでしょう。大学や学校には、教員と学生のコミュニティがあって、そこに入ってこそ得られるものがあるのです。

秋田：そういう意味では過渡期と感じますね。おそらく学会だけでなく、大学とか教育とか、そういうもののあり方自体が問われている。例えば淡路や千葉大学、農大のように、実習があるから対面ちゃんとやりましょうというタイプと、慶応や東大みたいに、もう授業はオンラインで、対面でやりたかったらそれなりのコストを払ってねみたいな。

一ノ瀬：以前聞いた話ですが、会員が100名ぐらいの小さい学会で、大会は必ず全員宿泊しての合宿というところがあるそうです。一緒に食事して、昼は巡検してというように濃密な時間を過ごすそうですが、リアルで集まることの意義が改めて問い直されているとも思います。淡路景観園芸学校の存在意義もまさにそうじゃないですか。町田先生の研究室にいるよりも少ない人数しか学生がいませんよね。

光成：うちのようなところは、フィールド実習や、淡路という立地を前面に打ち出して、その環境下で実践的に学べる少数精鋭を徹底していくことが生き残っていく道かなという気はしますね。

一ノ瀬：本日はコロナ禍における造園・ランドスケープの教育・研究についてお話を聞かせていただき、秋田先生、上田先生、町田先生、光成先生、そして一緒に司会を担当し、記録もとっていただいた新保先生、どうもありがとうございました。このCOVID-19の影響がいつまで続くのか、2021年8月時点で全く分かりません。今後も引き続き手探りの状況が続くのではないかと思います。一方で、本日の皆さんのお話からたくさんの新しい可能性が生まれてきていることを実感できました。最後には、学会のあるべき姿にまで話が広がりました。1年後にはまた違う世界が見えているのかもしれませんが、渦中の記録を残していくことは重要かと思います。また皆さんと議論できることを楽しみにしています。

編集注：学会誌をご覧の皆様へ、紙面の都合上割愛した話題を含めた座談会記事をオンライン公開する予定です。記事の閲覧パスワードは「JILA-zadankai-2021」となります。公開時期や閲覧方法については、本学会のウェブサイトや編集委員会よりお知らせいたします。

2021年8月3日 Zoom によるオンライン座談会の様子
(上段左から一ノ瀬・秋田、中段左から上田・町田、
下段左から光成・新保)